

藪の中

芥川龍之介

検非違使けびいしに問われたる木樵きこりの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処でございますか？ それは山科やましの駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に瘦やせ杉の交まじつた、人氣ひとけのない所でございます。

死骸は縲はなだの水干すいかに、都風みやこふうのさび烏帽子をかぶつたまま、仰向あおむけに倒れて居りました。何しろ一刀ひとかたなどは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾かわいて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅うまばえが一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたっけ。

太刀たちか何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄なわが一筋落ちて居りました。それから、——そう、縄のほかにも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通かよう路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師たびぼうしの物語

あの死骸の男には、確かに昨日きのう遇あつて居ります。昨日の、——さあ、午頃ひるごろでございます。場所は関山せきやまから山科やましなへ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子むしを垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重はぎがさねらしい、衣きぬの色ばかりでございます。馬は月毛つきげの、——確か法師髪ほうしがみの馬のようでございます。丈だけでございますか？ 丈は四寸よきもございましたか？ ——何しろ沙門しゃもんの事でございますから、その辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀たちも帯びて居おれば、弓矢も携たずさえて居りました。殊に黒い塗ぬり鞆えびらへ、二十あまり征矢そやをさしたのは、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようにならうとは、夢にも思わずに居りましたが、真まことに人間の命なぞは、如露亦如電によろやくによでんに違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免ほうめん物語

わたしが搦からめ取った男でございますか？ これは確かに多襄丸たじょうまると云う、名高い盗人ぬすびとでございます。もっともわたしが搦からめ取った時には、馬から落ちたのでございましょう、栗田口あわだぐちの石橋いしばしの上に、うんうん呻うなって居りました。時刻でございますか？ 時刻は昨夜さくやの初更しよこう頃でございます。いつぞやわたしが捉とらえ損じた時にも、やはりこの紺ごんの水干すいかに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携たずさえて居ります。さようでございますか？ あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございません。革かわを巻いた弓、黒塗りの鞆えびら、鷹たかの羽の征矢そやが十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおっしゃる通り、法師髪ほうしがみの月毛つきげでございます。その畜生ちくしょうに落されるとは、何かの因縁いんねんに違いございません。それは石橋の少し先に、長い端綱はづなを引いたまま、路ばたの青芒あおすすきを食つて居りました。

この多襄丸たじょうまると云うやつは、洛中らくちゅうに徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年しんねんの秋鳥部寺とりべでらの賓頭びんとう盧

びんずるの後うしろの山に、物詣ものもつでに來たらしい女房が一人、女めの童わらわと一しよに殺されていたのは、こいつの仕業しわざだとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出さしでがましゅうございませうが、それも御詮議ござんぎ下さいませう。

検非違使に問われたる媼おうなの物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附かたついた男でございます。が、都のものではございません。若狭わかさの国府こくふの侍でございます。名は金沢かなざわの武弘、年は二十六歳でございます。いえ、優しい氣立きだてでございますから、遺恨いこんなぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさざと、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘のほかに、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔つりぎねがおでございます。

武弘は昨日きのう娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございますしやう。しかし娘はどうになりましたやら、婿むこの事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥つばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいませ。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじょうまるとか何とか申す、盗人ぬすびとのやつでございます。婿ばかりか、娘までも……………(跡は泣き入りて言葉なし)

×

×

×

多襄丸たじょうまるの白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。い。い。くら拷問ごつもんにかけられても、知らない事は申されませう。その上わたしもごつなれば、卑怯ひきょうな隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午ひる少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上ったものですか、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなったのですが、一つにはそのためもあったのでしょうか、わたしにはあの女の顔が、女菩薩によぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間あいだに、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りつぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。(皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あばいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うずめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時はんときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つていと云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありません。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間あいだは竹ばかりです。が、半町はんちょうほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合つごうの好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう瘦やせ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎まばらになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早い、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩はいているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括くりつけられてしまいました。縄なわですか？ 縄は盗人ぬすびとの有難さに、いつ扉を越えるかわ

かりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頼張ほおぼらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星すばしに当たったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠いちめがさを脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しばられている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから出していたか、きらりと小刀さすがを引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈はげしい女は、一人も見た事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらをつかれたでしょう。いや、それは身を躲かわしたところが、無二無三むにむざんに斬り立てられる内には、どんな怪我けがも仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸たじようまるですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすがを打ち落しました。いくら気の勝つた女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後あとに、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋すがりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥はじを見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添いたい、——それも喘あえぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷ざんこな人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳ひとみを見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴かみなりに打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭ねんとうにあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑いやしい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒けたおしても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀たちに、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那せつな、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯ひきょうな殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしると云いました。(杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。)男は血相けつそつを変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利きかずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目ごうめに、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つて居るのです。わたしと二十合斬り結んだ

ものは、天下にあの男一人だけですから。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考え、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路やまみちへ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後この事は申し上げるだけ、無用の口数くちかずに過ぎますまい。ただ、都みやこへはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樽おうちの梢こずえに、懸ける首と思っっていますから、どうか極刑ごっけいに遇わせて下さい。(昂然こうぜんたる態度)

清水寺に来れる女の懺悔ざんげ

——その紺こんの水干すいかんを着た男は、わたしを手ごめにしよう、縛られた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶もたえをしても、体中からだじゅうにかかった縄目なわめは、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ころぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とつさの間あいだに、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端とたんです。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚さとりました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震みぶるいが出ずにはいられません。口さえ一言いちごんも利きけない夫は、その刹那せつなの眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃ひらめいていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑さげすんだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやっと気がついて見ると、あの紺こんの水干すいかんの男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛しばられて

いるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑さげすみの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中うちは、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥はじを御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は思いまわしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀たちを探しました。が、あの盗人ぬすびとに奪われたのでしょうか、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし辛い小刀さすだけでは、わたしの足もとに落ちてはいます。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇くちびるを動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言ひとこと云つたのです。わたしはほとんど、夢つつの内に、夫の縹はなだの水干の胸へ、ずぶりと小刀さすがを刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしよう。やっとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交まじつた杉むらの空から、西日が一すじ落ちてはいます。わたしは泣き声を呑みながら、死骸しがいの縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀さすがを喉のどに突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢じまんにはなりません。寂しき微笑) わたしのように腑甲斐ふがないものは、大慈大悲の観世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人ぬすびとの手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——(突然烈しき歎息すすりなき)

巫女みこの口を借りたる死霊の物語

——盗人ぬすびとは妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利きけない。体も杉の根に縛しはられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云っても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然しよげんと笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたましさに身悶みもだえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれの前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有ちゆううに迷っていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚しんに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行って下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色がんしよくを失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂つたように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様さかさまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるうか？ 一度でもこのくらい呪のろわしい言葉が、人間の耳に触れた事があるうか？ 一度でもこのくらい、——（突然迸ほとばしるごとき嘲笑ちようしよう）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒れたおされた、（再びたたび進むごとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ譲うなずけば好よい。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声ひとこえ叫ぶが早い、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟とっさに飛びかかったが、これは袖そでさえ捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去つた後のち、太刀たちや弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄なわを切つた。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪

の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟つぶやいたのを覚えている。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三度みたび、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀さすがが一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにこれの胸へ刺さした。何か腥なまぐさい塊かたまりがおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろつ。この山陰やまかげの藪の空には、小鳥一羽囀さえずりに来ない。ただ杉や竹の杪うらに、寂しい日影が漂ただよっている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇うすやみが立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀さすがを抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢あふれて来る。おれはそれぎり永久に、中有ちゅううの闇へ沈んでしまった。……………

（大正十年十二月）

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「新潮」

1922（大正11）年1月